

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成29年度病害虫発生予察特殊報第1号について

徳之島、沖永良部島、与論島のピーマン等において、ナスミバエ (*Bactrocera latifrons*) の発生が確認され、発生予察特殊報第1号を発表したので送付します。

なお、病害虫防除所ホームページ (www.jppn.ne.jp/kagoshima) にも掲載しています。

病害虫発生予察 特殊報第1号

平成29年10月30日
鹿児島県病害虫防除所

1 病害虫名 ナスミバエ *Bactrocera latifrons* (Hendel)
(ミバエ科)

2 発生確認及び発生状況

(1) 発生確認時期 平成29年6～10月

(2) 発生植物名 ピーマン、トウガラシ (シマトウガラシ)、シシトウ、ナス、
テリミノイヌホオズキ

(3) 発生地域 徳之島 (徳之島町)、沖永良部島 (和泊町、知名町)、与論島 (与論町)

(4) 確認状況 本年6～7月および8～9月に、奄美群島全域の計249地点において、ナスミバエの寄主植物であるナス科植物14種及びオキナワスズメウリから生果実を採取した。

これを7日程度、室内で保管し、ミバエ科幼虫または蛹の寄生が確認された上記(3)の地域のものについて、羽化成虫を同定した結果、いずれもナスミバエであることが判明した。

(5) 同定機関 門司植物防疫所、門司植物防疫所名瀬支所

3 形態及び生態の特徴

(1) 形態 成虫は体長約6～7mmで、胸部背面は黒色で両側に長い黄縦帯(2本)を有する。前翅はほとんど透明で、前縁脈の褐色帯は翅端部で斑紋状に膨らむ。腹部は褐色～赤褐色で、第3節以降の背板上にT字状の黒色紋はない。(ミカンコミバエは、胸部背面の色彩は本種と類似しているが、前翅前縁脈は翅端までほとんど同じ幅で継続し斑を形成しないこと、腹部3～5節背板にT字状の黒色紋があることから本種と区別できる)

(2) 生態 生育適温は26.5℃で、卵期間約2～3日、幼虫期間約9日、蛹期間約11日、産卵前期間約11日。成虫は1～2ヶ月以上生存し、雌成虫の総産卵数は1,000個以上になる。年間7～8世代繰り返すことが可能と推定されている。

(3) 寄主植物 トマト、ピーマン、トウガラシ (シマトウガラシ)、テリミノイヌホオズキなどのナス科植物のほか、オキナワスズメウリ等のウリ科植物でも寄生が確認されている。

(4) 被害 幼虫に寄生された果実は食害により腐敗する。シマトウガラシ等では加害部が水浸状になる。

(5) 分布 海外では東南アジア、ハワイ諸島、タンザニア、ケニアなどに分布。国内では沖縄県の一部で発生が確認されている。

5 防除対策

通常の慣行防除が行われていれば、目立った被害は出ないとされているが、以下の点に留意する必要がある。

- (1) 成虫の果実への産卵を防ぐには、防虫ネットで被覆するか、果実に袋がけをする。防虫ネットは目合い1.6mm以下を使用する。
- (2) ほ場の観察をきめ細かく行い、被害が疑われる果実や落下した果実、収穫しない果実は放置せず、速やかにビニール袋に入れる等して密封し、処分する。
- (3) 栽培終了後の株は放置せずに抜き取り、ビニール袋に入れる等して密封し、処分する。
- (4) ほ場内外の野生寄主植物（イヌホオズキ類、ホオズキ類、野良トマト等）は除去する。
- (5) ほ場周辺の藪地などナスミバエが生息しそうな場所に、ベイト剤（スピノエースベイト等）を散布することにより、密度低下やほ場への侵入防止が期待できる。

※現在、ナスミバエ防除のために作物に使用できる農薬の登録はないが、野外密度低減のためにほ場周辺の藪地等に散布する剤として、ベイト剤（スピノエースベイト等）の登録がある。

6 参考文献等

- (1) ミバエ類寄主植物調査ハンドブック 平成29年3月
大島支庁農林水産部農政普及課，奄美群島農政推進協議会
- (2) 知らなきゃ損する奄美群島の特殊病害虫～特殊病害虫の基礎知識～ 平成29年3月
大島支庁農林水産部農政普及課，奄美群島農政推進協議会



第1図 ナスミバエ成虫



第2図 ナスミバエ幼虫



第3図 幼虫の食害を受けた
ピーマン果実



第4図 幼虫の食害を受けた
シマトウガラシ果実